

——第一章…実話を元にしていきます(後で変えよう)——

「やってやる。落ちてやるぞ！」

まともに立っていられないくらいに静かな風が吹いた。叫ばずにはいられないくらいに静かな夜だった。思わず目を開いてしまったら落ちてしまいそうなくらい高いビルの屋上だった。

「終わらせてやるんからな。こんな会社なんて！っ」

鉄の棒で作られた欄干から手を放し、七階の下に落下する。そんな所を全ての会社員達も見、きつと部長も見て、社長も見、それで。

「……」

それで落ちて死ぬんだ。いや死んでやるんだ。そうすればきつと連中だって思い知るだろう。自分達がやってきた事がどれ程の事なのかを。きつと会社も色んなニュースとかに出て、それできつと。

「……」

目を硬く閉じたまま自分の手に放すように言い聞かせた。しかし欄干強く握りしめ過ぎて感覚がなくなった手は思い通りに動いちゃくれない。びくりともせず、死ぬ気で欄干を握っている。

木葉すら揺らがない風が耳に当たった瞬間全身が揺れる電車に乗っているかのように揺れ動いた。思わず目を開いてしまつと鼻の下から小さい車が道路を走って行く。全身の筋肉が今直ぐ逃げるよう叫びを上げているのにも、不思議と身が竦んだ。灯りがついているビル数軒と車の音が響き渡る荒んだ街は、意志を持ったかのようにこちらを吸い込んで落そうとしてくる。

「やつ、ばダメだ！」

落ちてしまいそうな気がして、ほんの数秒までそれを

望んでいたのに、身を遠ざけようとした。けれど上半身だけが欄干の向こうに逃げてしまい、そのまま後ろに仰け反る。結果頭から床に落ちて足がつかれてきては、人に見せられないくらい酷く恥ずかしい態勢を取ってしまった。それに後頭部がかなり痛む。

そんな時屋上の錆びれた鉄門が開かれ、声を張った山本部長が出てきた。いつも無表情だが眉が若干傾いていて目つきが鋭い。そこが庄になる。いつも無表情だからこそ怖い。

「おい佐藤！ 一体何時までタバコ吸ってたデメエーは」

「部長、すみません」

「なに訳の分からねえ事してるんだ？」

両足の隙間から顔だけを出した俺を見て、虫でも見るかのような目を向けた部長は軽く首を横に振って鉄門を閉じた。一番怪しいのは、その目が普段の物と然程変わらないという事実である。

「俺は自殺にも失敗するのによ」

起き上がった埃を叩き落とすと涙と鼻から変な汁が出てきた。涙はいつもの自分への情けなさによる物だったが、鼻からの物は分らない。鼻水ではないが、何だか変な感じである。

「心の涙って鼻から流れるんだっけ」

変な汁を拭き、自分の渾身の現実否定を乾いた笑みで流した。いつも通り残った仕事を片付けねばならない。勿論サービス残業等ではない。ただタイムカードを切つてから個人的に行う、時間内作業の残り分を会社でやるだけだ。

それだけだ。大丈夫。一度や二度失敗したくらいで、俺はそう簡単に諦めやしない。次は必ず成功してやる。

眠い。疲れた。間に合わなさそう。遅れるのは嫌だ。

そんな考え達はかりが頭に詰め込まれていた。短い納期、人員を上回る作業量、上司のパワハラまで、理不尽の欲張りセツト。会社の中で我々を追い詰める要素達は色々ある。けれど、何より耐えがたいのは、つまり情けない人生をどん底にまで突き落としてくれるのは、そんな会社にしか居場所のない自分自身だ。

疲労のせい目眩、吐き気をする昼頃から部長の怒鳴る声が頭に響き渡ってきた。最近目も悪くなって作業の成績が落ちたせいである。

「佐藤テメエー何だこの数字は！ 他は全員達成しているのにテメエーだけぞー！」

「申し訳ございません。すみません。次からはっ」

「そうじゃないだろうが。次からとか、そういう話じゃないだろうが！」

上司の前で頭を下げるのは怖い。同僚を後ろにして腰を折るのは情けない。後輩に見られている中で謝罪させられるのは、死にたいくらい惨めになる。しかし部長の怒鳴る声はかれこれ三十分、若しくは一時間と続いた。

何の意味もない憤怒と時間の無駄としか思えないつめは私の心と体力を何より効果的に削り落していく。

「聞いているのかテメエー」

「はい。申し訳ございません。必ず売ってきます。必ず契約取ってきます！」

「かならず？ 必ず？ もう下旬だぞ？ 今月分はどうすんだよ。上半期の二の舞か！」

そしていつものそれが始まった。今月分を処理しろという、決して断れない自由が。部長が席に座っていた、一番の成績を出している木村君をデスク前に呼ぶ。

「どうにか」

「どうにかじゃないよな！ ちゃんと数字出さないと意味ないけど、どうみたって君には無理っぽいんだが？ 木村君」

「はい」

自信気な声に真つ直ぐ伸びた背中、上の伝手で入社した彼は同僚である私を見て嘲笑を含んだ笑みを浮かばせている人を見下していると僅かに活気が戻っていくのが見て取れる。

「木村君。君の同期に教えてやりたいんだよ俺は。どうだい？ うちで売っている商品」

「僕の個人的な意見ですと、実用性、価格比、パフォーマンス、汎用性まで。どれを取っても他者の比較にならない良い商品だと思います。いつも家で使っています」

「聞いたか佐藤君。一番の成績出している木村君がこう言っているんだ。別にどうって事はないが、とにかく数字はちゃんと出さないとまともな給料は出せないからな？」

直接的には決して言わないが、はつきりと意図を伝えてきた。足りない数字の分を自腹で補えと。しかし買えば給料が消え、買わないなら訳の分からない項目で給料が削られるだろう。

「はい。売ります。数字出します」

「自信がないよ声に。自信持とう。夢とやり甲斐が社訓なのに、会社一番の財産である君がそれでどうするんだ」

夢、希望、遣り甲斐、自信、絆、家族、責任、一日一回以上は必ず言われる頭に釘付けされた単語の並びは不思議なくらいに耳に残る。それこそ眠る時ですら、早朝に目を開ける時でもだ。

朝会社の寮から起き、一時間の時間を得て会社に出勤して十一時に帰宅だ。土曜日は出来なかった分の仕事処理、日曜日は会社寮や外での飲み会やら名目のついた集い。

人間にとつての時間を最も効率的に奪われていた。しかし愚痴を吐き出している物ならすぐさま新しい仕事以降ってくる。

「なのに十年勤めて通帳には百万も残らないのか」

各種税金は良い。国民として払うべきだ。なのに給料明細にある親睦会費、機材損失、研修費、勤労感謝費は何なのだろう。何かを壊した覚えもないのに、何かを学んだ経験もないというのに、感謝もしていないに。

全ての席は扉のついていない個室のような構造で基本的に同じ部署の人とも会話をする事は余りない。けれど柵が低くて起き上がれば一目で数十名の人々が必死に仕事をしているのが目に入る仕組みだった。トイレに行こうと個室を出て通路を歩いていると皆の背中と様子だけが見える。

「もう五時か。パソコン、自動シャットダウンされる前にデータ保存しておかないと」

名目上退勤時間が始まったが、部署内の誰一人席から立ち上がる事はなかった。直ぐにデータを移して個人名義のノートパソコンで仕事を続けていくか、外に営業に向かう。

ここまで来ると不思議と生活にルーチンが出来上がった。一種のスケジュール表のように、睡眠や仕事と飲み会等でびっしりと詰められるのである。何か別の事をする時間がたった一刻も残されていない。

「どうしてこうなったんだろ」

ノートパソコンの画面に自分の顔が映っていた。眼鏡をかけても尚おぼろげな顔。それでも深いクマとぼさぼさの髪、無気力そうな目は見分けられる。それは懐かしいくらいに何もなかった中学生の頃の自分にそっくりだった。

いつも、学校で寝ては家に帰ってきていた。小説と漫画とアニメと映画ばかりで夜更かししては、三年という長すぎる時を浪費してしまっていたのである。

成績は常に中の中。生半端に記憶力が良いおかげか、最悪の成績でなかったからこそ落ちこぼれる事もない、そんな中の中。悪事に手を染める事もなく、新しく何かを始める事もなく、目の前のやるべき事に勤しむ事もなく、未来に備える事もなかったのだ。

(友達だった奴等、どうなったんだろ。大学卒業してから見てないや)

周囲の大人は皆成績成績と歌っていたが、それがどれくらい大切なのか理解出来ずにいた。寧ろ世の中の大人がそんなに凄いなら、親と先生は何で世界一の成功者になれなかったのかを疑問に感じてしまったのである。

ある種、親は期待を寄せていたのだろう。自分達も頑張らなかつた重要な時間だから、子供には努力して成功して欲しかったのだろう。結局、その努力も忍耐も苦しみも、他人ごとなのだから。

会社という体制で身を潜ませていたここは、余りにも悪辣に過ぎた。徹底、正しく徹底に私のようなバカを釣る為の隙間のない構造を整わっていたのである。

採用広告には全く問題なく給料や条件が記載されていた。但し基本給やら水増しやらを知ったのは、ちゃんと

読みもしなかつた雇用契約書にサインして入社した三ヶ月後の事である。

その間と言えば、ノルマを達成するのに精一杯だった。課せられた仕事量は多過ぎて、入社したばかりでノーマウも技術もなく、事務職で入ったはずが気付けば営業の部署に転属させられていた。家族にも周りにも事務職で入社したと豪語し、会社の寮にも入って三ヶ月。労働条件やら処された状況やらに気付けた時は、もう既に遅かつたのだろう。

それまで笑顔でいた人事の人間も、見せかけの面接会場も、全てが畏に過ぎなかつた。少しでも自分で考えれば気付けたのに、大学四年生の時は只管どうやれば楽に場を凌げるかばかりを頭の隅においてゲームに打ち込んでいたのである。

「ま、それは、今も同じか」

手に持つゲーム機のボタンを押しながら、疲れ果てた日曜の夜が過ぎていった。今週もまた何事もないままに過ぎてしまう。何も成さなまま流れてしまう。何一つ自分で考えないまま夜が明けてしまう。

薬を飲んでも連日に渡る吐き気と、次いでに視力検査もする為、私は病院に足を運んだ。

会社とは違う真つ白で眩しすぎる照明と馴染めない薬の匂い。それでも幸いなのか、病人達は皆可笑しなくらい元気だった。不思議と誰も一人ごとを延々呟いたり、明日にでも居なくなりそうな雰囲気を出していない。

「はい？」

そんな病院の三階、先生の前で私は首を傾げていた。ボードに貼られてある縦の頭の断面図には、何か汚れのような黒い陰が写っていたのである。それが何を意味し

ているのか分からなかつたが、医者の方介さを隠している不安な表情が事の深刻さを物語っていた。

「こちらに周囲と比べ色が薄い部分が見えます。どうやら佐藤さんは硬膜下出血、つまりは脳出血を起こしているようです」

「はあ」

「これは主に繰り返される、又は激しい脳震盪等による物です……」

余り話が入ってこなかつた。ただじつと先生の目を見つめて片耳で話を聞き流してしまう。

赤の他人に対する心配はあつただろう。患者に対する哀れみもあつただろう。しかし医者の顔から見れたのは諦めに近い何かだつた。いつも回りから、画面の消えたモニターから見えてきた他人事に「どうしようもない」と言わんばかりの目線。

「進行されている分を鑑みて、今直ぐに手術を行なわれた方が宜しいかと思えます」

自分で死のうとした時は脈が跳ねあがって、冷や汗が身体中から流れたのに、他人から死ぬと言われた瞬間私は何一つとして動じる事すらできなかった。頭が悪くて現実性を欠いた現実を直視できなかったのか、或いは寧ろ良かったと安堵してしまつたのか。

そんな中思い浮かべたのは、部長のせつつく声だつた。お医者さんの話を聞き零している耳の方から流れて、中毒されたように繰り返される。夢と希望、満ちた言葉は、思いの外心を酷く落ち着かせてくれた。

「そう、ですか。どうも下半期の目標は、達成できそうにないですね」

「はい？」

「いえ、何でもありません。手術、直ぐにでもやりまし

よう」

息を吸ってから吐いた時、清々しさが腹の奥に留まる。心配事も情けない思いも負担も、何もかもが無意味な塵となつて一呼吸で消えてしまった。何も真剣に考える事のなかった、子供の頃に戻ったかのような気分に入り、思わず微笑が漏れ出てしまう。

「所で」

「何でしょうか。何でも仰ってください。ご家族への連絡もこちらから」

「いやそういうんじゃないなくて、国民健康保険は使えるのでしょうか？」

久方ぶりに一日中何もしない日を持つてみた。それは幼稚園児に戻れたようで、仕事からも課題からも受験からも成績からも課題からも解放された、限りなく無責任な自由を体験させてくれる。

熟睡してからようやく目がちゃんと醒めた。社歌を忘れ、仕事への責任を投げ捨て、ただ今に与えられている環境の中だけの自由さを満喫してようやく目覚められたのである。

「そっか。あんな場所にいたのに、何も変わってなかったのか」

小学校に入って家庭以外の社会を目にすべきたった。中学生になつて競争を経験するべきだった。高校生の時は周りとの差を認めて努力していくべきだった。大学生に相応しい責任感と未来への対策を立てるべきだった。

なのに私は何もしていなかった。あんな会社の中でもずっと同じだったのだろう。

「ずっと同じだったのか」

「ゴミみたいな私が、ゴミみたいな会社を構成していた。

私はあんな場所の他には仕事をして生きられなくて、あの場所は私みたいな人を雇わずして存在して居られないのである。

「何も考えずに働けたから、耐えられたのか」

忙しくて死にそうだった。死ぬ直前まで行つて、正しく今死を目の前にしてしまつていく。そしてようやく仕事から離れて自分を省みる事ができた。あんな場所だったのにも辞めずに続けていられたのは、ある意味あの場所が楽だったからなのである。

「自分で何かを考えるのって、大変だからな」

自分で未来の事を考える事、自分で現実を見つめる事、自分で自分の過去を直視する事。それ等は人生を生きる上で必ずしなくちゃいけない事なのにも、苦しくて辛くてしようがない。だからそれ等一切をする必要のないあの場に流されていられたのだ。

「そういえば大学生の時は面白半分で小説も書いてたっけ」

目を瞑るだけで瞼の裏に浮かび上がってくる、なんて綺麗で輝かしかつた時間だろうか。何も考えずに友達と合つた事を許され、実家の暖かさを感じれた時間。もう既に脳裏の更に向こうへと消え去つた、過ぎては二度と取り戻せない思い出の、その積み重ね。

白い患者服だけを身に纏つて手術室に入ると口に呼吸を補助してくれる装置が付けられた。目を隠す程に長く伸びていた髪が剃られ、腕に注射の針が刺される。手術の成功率は半々と口にしていたが、医者緊張した顔を見れば正直な所半分以下だろう。

少しジツとしていると麻酔が回つてきたのか瞼が重くなる。これから生死を分ける瞬間に浮かんできたのは、不思議とこれからの事だった。

（会社では、あんなに何も浮かばなかったのにな）

人生の中でこれほど努々しく、希望的で、前向きかつ、身体の浮く様な気分を味わつた事はない。つまり、今更何かをしたくなつたという事だ。

手術室に入る寸前、書いておいた落書きとも言える文書を思い出ししている。

（一先、一章は「実話を元にしていきます」とだけ書いておいたんだがな）

できれば、できる事なら、映画や漫画のように希望的な未来を描きたい。今までの人生、神様に頼んだ事もなかったけれど、もしも一度チャンスを与えてくれるとしたら、今度は自分の人生に責任を持つて生きてみたい。それが出来るという自信が今の私にはある。

（もう誰も私は止められないぞ。映画のワンシーンのように人生を楽しんでやる。今度こそ真つ当に、後悔のないようにな！）

これから先の内容は実話だけだ。どれほどに平凡で詰まらなくとも、確かに生きていく人の人生を書き留めた内容となる。できれば、誰かの目に留まって欲しい。どこにでもいる「私」の人生が誰かの為になるのならば幸いだ。

——第二章…幸せの始まり——

END